

保健体育科における教科の本質に迫る授業づくり

保健体育科 倉嶋 昭久

1 教科の本質とめざす生徒の姿

これからの予測困難な時代、学校教育には子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働しながら課題解決に向かうことが求められている。保健体育科においても、運動の課題解決に向かっていく中で身体的な知識や技能といった側面のみならず、他者と協働するといったかかわりなどの文化的な側面も見いだしていくことは重要である。また、保健体育科の学習と実社会をつなぐものとして、体を動かすことや運動種目が有する楽しさや喜びに触れ、自己の適性等に合わせて多様なかかわり方を見いだしていくことが求められている。

これらのことから、生徒が生涯にわたってスポーツとかかわっていく、つまり豊かなスポーツライフを実現していくために、保健体育の授業においては、運動の楽しさや喜びを十分に味わわせていきたい。そして、「する、みる、支える、知る」といったスポーツとの多様なかかわり方を身に付けさせたい。運動ができるできないにかかわらず、できなくてもその運動種目に携わることは可能である。例えば、『『する』ことはできないが、分析や教えるなど『みる』や『支える』ことはできる、『する』ことは苦手だが、試合を観たり応援したりするといった『みる』ことは好きだ』などがそれである。運動の楽しさや喜びを十分に味わった生徒は、自己の適性等に合わせてスポーツとの多様なかかわり方を見だし、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現していく基礎を培っていくのである。ここに保健体育科の本質があると考えられる。

【保健体育科における教科の本質】

生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、他者と協働しながら運動やスポーツの有する楽しさや喜びを味わい、運動やスポーツに親しんでいこうとする態度を身に付けること

【保健体育科における教科の本質を踏まえた生徒の姿】

他者と共に運動する中で、運動やスポーツを楽しさや喜びを視点にとらえ、自己の適性等に合わせて「する・みる・支える・知る」の多様なかかわり方と関連付けて、運動やスポーツのもっている新たな価値やよさを実感している

2 当校の生徒の実態と具体的な手だて

当校の生徒は、この種目はできないから、苦手だから積極的に取り組めないといったように、技能面に特化したできない、得意不得意に左右され、それぞれの取り組み方に大きな差が生じている。これは、消極的な生徒が「する」という側面でしか、その運動にかかわられていないことを意味し、さらにその運動が有する楽しさや喜びを十分に味わうことができていることを意味している。また、できない、不得意だと思っている生徒の中には、最初からあきらめている姿も見受けられるのが現状である。

このような当校の生徒の実態を踏まえ、以下の手だてを講じる。

<手だてア>

現段階の技能でゲームなどを経験した後に、モデル映像などを視聴する活動を組織する

生徒の運動に対する興味・関心を高め、運動の楽しさや喜びを感じるための素地の形成を

促すために行う。生徒は、単元のはじめに現段階の技能でゲームを行う。当然ながらその段階では、思うようにプレイすることができず、動きの困難さを感じる。そこで、はじめのゲームを行った後に、モデル映像などを視聴する活動を組織することで、生徒はその運動に対しての大きな興味・関心を高めたり、モデル映像の動きに対しての憧れを抱いたりする。そして、自分（たち）とモデル映像の動きの違いから課題を見いだしたり、モデル映像の動きから、よい動きにつながるポイントを見いだしたりできるように促す。これにより、生徒は、その運動について主体的に思考していき、運動の楽しさや喜びを感じるための素地を形成していく。

<手だてイ>

タブレット端末やワークシート、作戦ボードなどを活用しながら、よりよい動きになるよう、小グループで観点を基に動きの分析を行い、修正点を見いだしていく活動を組織する

運動ができる楽しさや喜び、運動を観る楽しさや喜びを感じさせるために行う。ここでは、自分（たち）の動きとモデル映像の動きを比較分析し、それを基に自分（たち）で工夫しながら運動に取り組むことを促す。その際、生徒は動きの分析を行うと、ただ漠然と動きを観ることがあるため、観点を全体で共有し明確にした上で、動きの分析活動を行っていく。この分析活動では、タブレット端末を使用してプレイ映像を撮影し、客観的に自分（たち）の動きを観られるようにする。また、ワークシートや作戦ボードなどを活用し、動きを可視化できるようにしながら修正点を実際の動きにつなげやすくしていく。生徒は、実際に自分（たち）の動きを観点をもとに分析することで、スローモーション機能などを使い、足の位置や膝や腕の角度を観るなど、運動を科学的に観ることができるようになる。そして、それが動きの改善につながったり、他者への効果的なアドバイスにつながったりすることで、生徒は運動ができる楽しさや喜び、運動を観る楽しさや喜びなどを実感し、運動への興味・関心をさらに高め、主体的に運動とかがかわる資質・能力を身に付けていく。

<手だてウ>

ルールや実施方法などを工夫し、これまでと違った運動の楽しみ方を実感するための活動を組織する。

運動もルールや実施方法を変えるだけで違った楽しみ方ができることを実感させるために行う。単元後半にこれまでの学習で深めてきた知識や技能を生かしながら、自分たちでルールや実施方法を変えたゲームを展開する活動を組織する。これまでもルールや実施方法を変えたタスクゲームやスモールステップを入れた学習は行ってきたが、これはあくまでも生徒が知識及び技能を習得していくために授業者主導で行ってきた手だてであった。そこで、生徒が自分たちでルールや実施方法を変えて取り組んでいくことで、生徒が主体的にこれまでと違った運動の楽しさや喜びを見いだしていけるように促す。さらに、その際に運動ができない、得意不得意にかかわらず、誰もが楽しく運動に取り組めるようなものを考えさせるように促すことで、協働的に物事を考えていく視点も養うことにつながる。普段、テレビ等で見ている種目の正式なルールで行ったり、正式なルールのゲームを見たりすることのみに楽しさや喜びを感じていた生徒が、自分たちでルールや実施方法を変えて行ったり、取り組み方を工夫したりすることも楽しいのだということを実感していくことで、これまでの運動のとらえ方を変容させ、その運動の価値を新たに見いだしていくのである。そして、自己の適性等に合わせたスポーツとの多様なかかわり方を見だし、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現のための基礎を培っていくようになるのである。